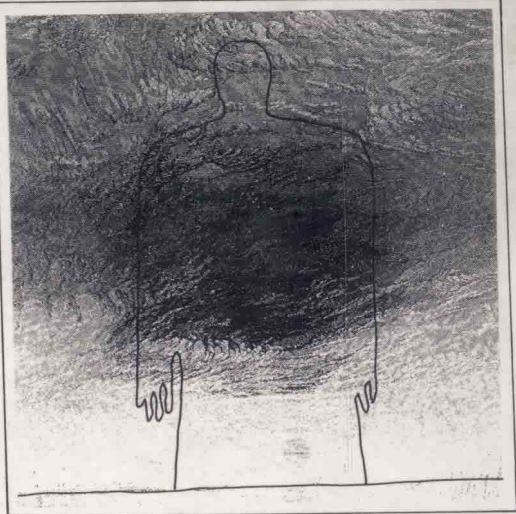


夜の蟻 高井有一



夜の蟻

高井有一

筑摩書房

高井有一（たかい・ゆういち）
一九三二年東京生まれ。作家。
『北の河』（芥川賞）、『夢の碑』
（芸術選奨文部大臣賞）、『虫た
ちの棲家』『裸木』『この国の
空』（谷崎賞）、『塵の都に』他。

夜の蟻

一九八九年 五月 三十日 第一刷発行
一九九〇年 二月 十五日 第六刷発行

著者 高井有一

発行者 関根栄郷

印刷 明和印刷

製本 矢嶋製本

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六―四
振替 東京六―四―一二三
電話 東京五六八七―二六八〇（営業）
五六八七―二六七〇（編集）

乱丁・落丁本の場合はお取替えいたします。

夜の蟻・目次

半日の放浪

3

断桥

39

家族の虚実

75

木彫の雛

119

雪吊り

157

菖蒲まつり

195

櫻紅葉

233

装
幀
司
修

夜の
蟻

夜の蟻迷へるものは弧を描く

中村草田男

半日の放浪

銀座に鰯料理を専門に食べさせる店がある。昼食時は霞ヶ関の官庁街からわざわざ食べに来る人もあつて、立つて待たなくてはならぬくらゐ込み合ふが、午後一時半を過ぎれば、客はほぼ一斉に退いて閑散となる。

私が入つて行つたときには、揃つて黒っぽい服を着た三人の男が、細長い卓の壁際の端で酒を飲んでゐるほかは、一人で食事をする客がちらほらゐるだけであつた。私は、三人の男が斜め前に見える位置に坐つて南蛮揚げ定食を注文し、ついでにビールを一本と言はうとしたが止めた。飲んでしまへば、あと歩くのが億劫になりさうであつた。

鈴木君はほんとに酒が好きだな、と笑ひを含んで言ふ声がした。三人の男は、私の方に背を向けて二人が並び、もう一人がそれに向ひ合ふ形で坐つてゐる。鈴木君、と呼ばれたのは私から顔の見える男らしかつた。小造りで顎が尖つて、髪はまだ黒いが、まるで光沢のない肌に刻んだ皺の深さから察すると、六十代の半ばを超えてゐるだらうか。彼は盃を差出しながら何か言つたやうだつたが、私の所までは聞えない。

私の食事が運ばれて来た。私は、よほど天氣の悪い日以外は、昼食は外です。銀座へは、

一週間か十日に一度の割で出て来る。家のある堀切から京成電車と地下鉄を乗継いで四十分余り、暇のある私にとつて銀座までは遠い距離ではない。彼が政務次官をやつたのはいつだったかね、と私に背を向けた二人のうち、左側の肥つた男が言つた。紺地に白の縦縞を入れた背広の背が、丸く膨らみ上つてゐる。あれは三木のときだったか、それとも福田になつてからか。

福田のときだ、と右側の男が言つた。彼は今朝床屋へ行つたばかりのやうに髪を短く刈り上げ、油で撫で付けてゐた。君は政治部長をやつてたんぢやなかつたか。いや、福田のときなら論説に移つてゐた、と肥つた男は答へて、更に言葉を継いだ。彼は残念な事をした、大臣をやリたかつたんだよ、大臣やれば勲一等がもらへるだらう、さうすれば宮中の席次も上るからね。彼は格式ばつた事が好きだったな、と髪を刈り上げた男が言つた。

勲章の欲しかつた男は最近死んだのだらう、と私は思つた。三人はそれぞれに職業の違ふ友人のやうであつた。大学の同期生だらうか。彼等がどうしてこんな時分外れに集つて酒を飲んでゐるのかは、見当がつかない。彼等の話は、彼はいつ死んだ、あいつは何年前だった、と死んだ知人の噂へと移つて行つたが、鈴木と呼ばれた男だけは、殆ど口を挟まず手酌で盃を重ねてゐた。みるみる酔が深まるのが判るやうな飲み方であつた。

酒拔きの食事は、どんなにゆつくりとしても十五分もあれば済んでしまふ。やはりビールを飲めばよかつたと後悔しながら、私はお茶のお代りを注いでもらつた。おい、ちよつと、と肥つた男が店の女主人を呼び、入口近くの土産品を置いてある棚を見て、あそこにある生姜煮を

一つ包んでこの人に上げて呉れないか、と言つた。この人、と顎で指された鈴木と呼ばれた男は、いや、いや、といふ風に首を振つた。彼の上半身は揺らいでゐた。ああそれから、この塩焼食はないんだらう、一緒に包んでやつて呉れよ、と肥つた男は重ねて言ひ付け、この人はね、奥さんに死なれて独り暮しなんだ、と付加へた。まあ、それは御不自由で、と女主人は手を付かなかつたらしい塩焼の皿を、調理場へ下げて行つた。酒もあるぢやないか、と今度は髪を刈上げた男が言つた。土産品の棚に「原酒」とラベルを貼つた瓶が置いてあつた。あれも持つて行けよ。いや酒は要らん。鈴木と呼ばれた男の声は、意外にしつかりしてゐた。酒があると俺はつい飲み過ぎちまふんでな。お互ひ弱くなつた、と肥つた男が言つた。車を待たせてあるんだ、君の都合のいい所まで送らせるよ。済まん、遠くまででなくていい、有楽町の駅まで送つてもらはうか。遠慮するな、もつと先まで行けよ。

女主人が土産の包を持つて出て来たのをしほに、私は席を立ち、勘定を頼んだ。この人はね、と私の背後で肥つた男が言つてゐた。若い頃は一ばん出世が早かつたんだ、三十代で東京の工場長になれる人間は、滅多にあるもんぢやない。さうでせうねえ、と女主人は、相手の調子に慣れ切つてゐるやうな応対をしてゐた。私は、彼等の方を振り返らずに表へ出た。

陽射しが暖かく、風も無くて、二月の初めにしては穏やかないい日和である。好日を恵まれたといふ気がした。路上にもコートを着ずに往き来する人の姿が目立つた。若し雨が降つたり、風が強かつたりしたなら、今日一日を妻と二人、家財の失せてがらんとした部屋に縮こまつて

過ぎなくてはならなかつたらう。私は、一軒一軒店先をのぞくやうにしながら、七丁目の画廊へ向けて歩いた。

今日は戦後間もない時期に私が建てた家に住む最後の日なのである。明日、私たち、私と妻とは、電車で一と駅離れたところに臨時に借りたアパートへ引越す。家財の大半は、二日前にトランクルームへ預けてしまつたから、引越しは四頓積みのトラックが一台あれば間に合ふだらう。明後日、家は壊される。こんな家、半日もすれば跡形もなくなる、と毅夫は言つた。多分その通りだらう。そして遅くとも十一月には、鉄筋コンクリートの家が建つ筈である。そこに住むのは私たちだけではない。私たちは二階に住み、階下には毅夫の一家四人が越して来るのである。三世代同居の理想的な家が出来上る事になる。

今朝私は、眼が醒めるなり二階の雨戸を明けて、庭の百日紅と木斛と錦木との枝に、それぞれ赤い布裂れが結へ付けられてゐるのを確かめた。家を壊すブルドーザーは、庭木までもあつといふ間に木屑にしてしまふ。枝に結へた赤い裂れは、私の愛着が深く、動かしてはならぬ木の印である。この庭で勝手な事はさせぬ、といふ私のささやかな意志表示でもある。

次いで私は、裏手の窓も明けた。家の裏側には、小路一つを隔てて堀切菖蒲園がある。毅夫が大学へ入つた年に二階を増築したとき、北窓を広く採つたのは、園に咲く花菖蒲を居ながらに楽しむためであつた。つい四年前まで、つまり私が現役であつたころには、同僚や知人を招いて年に一度、花菖蒲を観る会を催した。花菖蒲の見頃は六月半ば、それも小雨の降る日が好い。

雨を吸つた葉が鋭く突立ち、花も艶を帯びる。園内は遠くからカメラを持つてやつて来る客で
ごつた返すが、あちこちでフラッシュの閃く光景を酔つた眼で眺め下すのは、まことに王侯の
気分だと言つて呉れた人があつた。酔余にした寄せ書を何枚も、私は棄て兼ねて保存してゐる。
冬の園内は、静観亭といふ集会所の前の花壇に植ゑた草花のほかは彩りがない。菖蒲は花床
の土とはほ同じ色に枯れ果て、一株づつ葉を束ねられて打ち伏してゐる。その形は、人の首が
転がつてゐるのに似てゐなくもない。昇つたばかりの陽が、園の向うに建つマンションの白壁
を微かに赤く染めてはゐるが、光はまだ枯れた菖蒲の上にまで及んではゐない。凍てついて暗
みの漂ふ景色に私は足が冷えて我慢ができなくなるまで見入つた。新しい家も同じ場所に建つ
のだが、その鉄サッシの窓から私が花を眺める気になれるかどうかは判らない。

毅夫が初め私に提案したのは、今の家の建替へではなかつた。彼は土地も家も売つて、郊外
へ移らうと言つたのである。二番目の子供が生まれて、いかにも手狭になつた社宅住ひを切上
げたくなつたのであらう。それには借金をして独力で建てるよりも、行くゆくはどのみち自分
の物になる親の財産を活用した方が利口だと計算したのであらう。さうした考へ方を私は咎め
はしない。私だつていつかは彼の一家と同居する心積りはしてゐたのだから。しかし、何事に
も周到な彼が郊外分譲地のパンフレットを持つてやつて来たとき、自分でも予期しない反撥心
が湧いた。恐しく吹きつ曝しの所だな、と丘陵を開拓した造成地の写真を見て、私は言つた。
それに夢見ヶ丘とはよく恥かし気もなく付けたものだ。まあ今は殺風景だけでも、と毅夫は逆

らはなかつた。家を建てて木を植ゑればすつかり変るよ、木を育てるのは、お父さん、楽しみぢやないですか。木が育つまで俺が生きてゐるわけがない、とは流石に私は言はなかつた。毅夫は用意したメモを見ながら、その夢見ヶ丘なる土地に住む利点を次つぎに挙げた。取り分け彼が強調したのは陽当りであつた。きつと冬でも陽灼けするよ、お父さん。

ものの百米とは離れてゐない荒川の堤防の上に高速道路が構築されて以来、私の家の環境は變つてしまつた。騒音もさる事ながら、日照が失はれたのが私には堪へた。冬場は二時過ぎると、高速道路の影が家を覆ふのである。さうなつてからしばらく、私は、陽の翳る時刻が近づく庭へ出て、高速道路の向うへ意外な早さで陽が隠れて行くのを、いまいましくみつめてゐたものだ。陽の色が消えると、俄かに周りに寒さが立ちこめるやうな気がする。私はわざと大きな嚏をして妻に笑はれたりした。私がそんな風だつたのを、毅夫も当然知つてゐたであらう。

毅夫の説明は、そのほかすべてについてそつがなかつた。陽の当らぬ場末の低湿地から陽光あふれる郊外の高台へ。自分たち一家の利害が基本にあるとは言へ、彼が精一杯に誠意を尽さうとしてゐる事は疑ひやうがなかつた。いい息子だな、と私は皮肉でなく言つた。お前は息子で苦労しないで済んでゐるから羨しい、と同僚に言はれた事が思ひ出された。確かに毅夫は出来がいいとは言へぬまでも、手間のかからぬ息子である。小学校から大学まで際立つた成績は示さなかつた代りに、中位以下に下りもしなかつた。高校、大学の受験と就職試験に一度も失敗

しなかつたのは、彼が常に自分の能力で手の届く範囲を慎重に計量した結果である。お前みたいなのは一流にはなれんぞ、と酔つたまぎれに私が言つたとき、一流とか二流とかそんな格差をつけるのは時代遅れだ、と彼は答へた。自分の性格への私の秘かなこだはりを、彼は見抜いてゐたかも知れない。

なるべく急いで検討してみて下さい、と毅夫はパンフレットや契約説明書を私の方へ押して寄越した。その必要はないよ、と私は押返した。この家売る気はないからね。ここで曖昧な態度を示してはいけない、と私は思つた。毅夫の指図は受けないといふ私の意志が、語氣を通して伝はるやうに喋つたつもりであつた。

それからは紆余曲折があつた。妻が間に立つた。妻は毅夫の話を私より先に聞いて、内心私の賛成を期待してゐたらしい。どうせあたしの方が後に遺つてあの子の世話になつて暮すのだから、あの子の氣に入らない事はさせたくない、と言つた。私は黙つてゐた。妻は毅夫の社宅へ泊りがけで出掛け、今の家を壊して、跡地に二世帯が階上階下に分れて住める家を建てる案を、大凡の費用分担保まで含めて決めて来た。いいだらう、俺だつて何もお前と二人きりでゐたいわけぢやない、と私は言つて、これでまた人に羨まれる種が増えた、と思つた。氣の優しい息子の家族と暮す安定した老後。まさにその通りには違ひない。

世間の眼から見れば、最初の毅夫の主張は筋の通つた常識的なものだつたらう。しかしそれに反対した私の言ひ分も、あながち無法だつたとは思はない。そしてその中間を取つて、現実

的な案が立てられ、実行に移された。私も、これより良い解決策はなかつたと思つてゐる。私と息子と双方に対する妻の氣遣ひには、感謝してゐる。それなのに、自分の持ち物を無体に取り上げられたやうな虚しさに加へて、憤りまで湧くのは何故だらう。

今日、朝の間は出掛けるつもりはなかつた。残る一日を古い家の中で落着いて過したい氣持もあつた。だがいつもと同じに朝食を済まし、二階の座敷に坐つて、もとの勤め先の好意で定期的に廻してもらつてゐる翻譯の仕事をぼつぼつやつてゐるうちに、居たたまれなくなつて来たのである。黒ずんで所どころが反り返つた杉板の天井や、把手の廻りに手脂の染みが付いた北窓の硝子障子、簞笥を退けた痕がくつきりと青白く遺つてゐる畳。今日限りで消えてしまふものが、私に向つて群がり寄つて来るやうな氣がした。私がもう少し昔者であつたなら、家霊に責められてゐると感じたであらう。私は追はれるやうに階下へ降り、台所で片付物をしてゐる妻に、飯を食ひに銀座へ出ないか、と声をかけた。あたしは用があつてそれ所ぢやない、と素氣ない返事が返つて来た。それにこんな日は、あなた一人の方がいいんじゃないの、その代り、帰りにデパートで晩の物を見繕つて買つて来て下さい。こんな日、と妻は微かに笑ひを含んで言つた。私が一人で感傷に耽りたいのだとも思つたのだらうか。まあ、それだつて構はない。

鈴木と呼ばれてゐた男が女房に死なれて独り暮しだと、あの肥つた元政治部長が店の女主人に告げたのは、余計なお切匙といふものだ、と電通通りの信号に足を停められたところで、私